

2020年度 教育学研究科 博士課程指導教員一覧【前期課程・後期課程】

(五十音順)

泉 恵美子 教授	前期・後期課程
<p>専門は英語教育学。主な研究領域は、コミュニケーション、カリキュラム・授業研究、小学校英語、評価。特に、英語による異文化間コミュニケーションにおける挫折と修復、コミュニケーション・ストラテジーをテーマとして、スピーキングの指導と評価も含め研究を行っている。また、学習者と教員の自律を目指し、内省／探求的手法を取り入れた授業研究に取り組んでいる。更に、小学校英語におけるリタラシー指導や、学習者の自己効力と自律性、思考力・判断力・表現力等を促進する授業設計と評価の在り方について研究している。</p>	

稲富 眞彦 教授	前期課程
<p>障害児・者の心理・生理・病理の変容過程を発達の質的転換期との関連で検討し、教育指導のあり方について検討することが大括りの研究テーマである。具体的研究テーマは次の6点である。①自閉スペクトラム症等の発達と障害の変容過程、②ダウン症児の発達と指導、③重症心身障害者の発達理解、④乳幼児の発達相談、⑤障害児の教育方法、⑥インクルーシブ教育。</p>	

今津屋 直子 教授	前期・後期課程
<p>専門は食育、家庭科教育。食べもの、食べ方を通して人間性を育む食育を中心に、幼児期・学童期の子どもたちの生活の自立へ向けての支援や環境について家庭科教育の立場からも研究を展開している。</p>	

岩坂 二規 准教授	前期課程
<p>地球市民を育む教育としてのグローバル教育について、開発、人権、平和、環境といったグローバル・イシューの鍵概念をもとに学際的に研究しています。また、その前提となる批判教育的な視点から、シティズンシップ教育やユースワークなどの広い意味での教育の可能性を模索しています。</p>	

岡本 哲雄 教授	前期・後期課程
<p>現代を意味喪失の時代と受けとめ、「人間と教育」再発見のために、私たちが互いに形成し合う働きを「存在の謎」や「生きる意味」の次元に引き寄せて考えています。研究領域は、教育哲学、人間形成論。とりわけ、V.E. フランクルの臨床哲学を柱に、子どもの人間学や解釈学的方法、東西の宗教思想を手掛かりに研究しています。</p>	

オムリ 慶子 教授	前期・後期課程
<p>イタリアで幼児教育メソッドが生まれた19世紀初頭のアポルティ・メソッドから、20世紀のアガッツィ・メソッドやモンテッソーリ・メソッドまでを研究対象として、イタリア幼児教育の歴史の変遷について研究している。現在はその中でも、イタリアに導入されたフレーベル思想や幼稚園がイタリアの幼児教育にどのような影響を与えたかについて研究を進めている。目下とりくんでいる課題は、ヴェネツィアのユダヤ人コミュニティで、ドイツ生まれの幼稚園がどのように受容されていったのかを明らかにすることである。</p>	

梶原 直美 准教授	前期課程
<p>専門領域は、キリスト教および死生観の研究です。霊性の表現である祈りの研究とともに、人間の生き方、宗教と倫理の関係を主たる研究内容としています。すなわち、不完全で弱さを持つ人間が、生きるプロセスにおける体験からいかに学び、それをいかなる生き方に繋げ得るのかを、根底にある宗教性あるいは精神性との関連において探究しています。</p>	

清原 知二 教授	前期課程
乳幼児・児童の造形活動の発達やそれに応じた教材開発の研究。また、それらが心身の発達にどのような意味があるのか研究を行っている。特に注目しているのは外部からの情報を得る感覚受容器、とりわけ触覚を中心とした体性感覚の研究を行っている。	

金田 茂裕 准教授	前期・後期課程
教育認知心理学・発達心理学の観点から教授（教えること）と学習（学ぶこと）に関して理論的・実証的に研究しています。また、数の知識の形成過程に関心を持ち、調査・実験、関連資料（国内外の教科書など）の検討を行っています。	

栗山 誠 教授	前期・後期課程
美術教育と乳幼児期の造形あそびについて研究をしている。特に子どものモノ環境に関わる活動（造形活動）の過程に注目し、子どもにとってのリアリティ（＝面白さ）とは何か、意味の発生と展開、身体性、認識面などの観点から研究を行う。また発達に沿った造形素材の研究と教材開発、創造的な環境について探究している。	

齋木 喜美子 教授	前期課程
ライフワークとして取り組んでいるテーマは「近代以降沖縄の児童文化・児童文学史研究」で、専門分野は児童文化・文学と絵本研究である。研究方法は歴史研究を主軸としているため、可能な限り原典にあたり、自身の眼で確認しながら研究に取り組むことが大切だと考えている。また、作品が誕生した背景、その作品の受容史と展開過程を探るだけでなく、子どもたちに読み継がれてきた作品の魅力は何なのか、作品分析を行う。	

佐藤 真 教授	前期・後期課程
専門は、教育方法学。総合学習等の子供に寄り添いながらの教育課程の開発、ティーム・ティーチング等による教授組織の改善等による教育方法の改革、ポートフォリオ・ルーブリック・モデレーション・パフォーマンス評価等の質的な教育評価の研究をしています。	

眞城 知己 教授	前期・後期課程
20年以上にわたりイギリスとデンマークの障害のある子どもに関わる外国教育制度の特質に関する研究を続けながら、特別な教育的ニーズ概念とインクルーシヴ教育の新しい理論モデルの開発研究を行っている。	

菅原 伸康 教授	前期課程
専門は障害児教育です。具体的な研究内容は、以下の3点です。 ①障害のある子どもの「ことば・文字・数」の学習教材・教育支援機器の開発と製作 ②上記の自作教材・支援機器を使用しての障害のある子どもへの教育支援 ③障がい児者の家族成員の個と関係性のアイデンティティ様態に関する研究	

高井 由起子 准教授	前期課程
私の従来からの研究課題の一つとして、子ども虐待の問題がある。子どもへの虐待に関する問題については、育児ノイローゼや子育て環境の悪化等による虐待行為の予防（広い意味での子育て支援）、子どもに虐待行為を働いてしまう加害者への対応、虐待被害を受けた子どもへのケアのあり方等、様々な角度からの考察が必要であると考え。また、児童虐待防止法にも明記されている通り、子ども虐待とドメスティックバイオレンスは非常に密接に関連している。この意味でもドメスティックバイオレンス（デートDVも含む）の問題についても研究課題として追求している。	

辰己 隆 教授	前期課程
<p>児童養護における社会的養護のあり方について研究しています。特に、児童養護施設の日常生活、親子関係、自己実現・自立などの支援・援助、権利擁護システムについて、さらに、保育士・児童指導員などの専門職としての資質と倫理、運営管理および責任者である施設長の資質と倫理と使命についても研究領域としています。</p>	
谷村 宏子 教授	前期・後期課程
<p>保育における音楽活動による幼児の情動や行動の変容を、教材および保育者のかかわり方の観点から研究する。また、特別な支援を必要とする乳幼児に対する支援の一つとして音楽療法の視点から援助のあり方を検討する。とくに音楽のもつ機能から音楽行動を分析し、効果的な援助方法について研究を進める。</p>	
富江 英俊 教授	前期課程
<p>道徳教育を「共同体への帰属意識」という観点から考察することを、ひとつの研究テーマとしている。「道徳の教科化」のなかで、道徳教育における個人と集団との関係のあるべき姿を模索していきたい。また、「教育格差」や「かくれたカリキュラム」など教育社会学の代表的な研究テーマにも関心を持っている。</p>	
中尾 正広 教授	前期・後期課程
<p>専門は、トポロジーと算数・数学教育。教材研究の立場から、特に幾何学的領域に興味を持っている。教科教育法の一分野としての算数科教育法における教材開発を主要な研究課題としている。</p>	
中村 千晶 准教授	前期課程
<p>主要な研究テーマは乳幼児を中心とした子どもと音楽。音楽的能力、音楽性の発達を中心に、保育・幼児教育における表現および音楽活動、幼児音楽教育の方法論について研究している。また、それらに関連したピアノ演奏法の研究も行っている。</p>	
橋本 真紀 教授	前期課程
<p>子育て家庭への支援についてソーシャルワーク、保育の観点から研究を行っている。特に、乳幼児とその家庭への個別支援、子育て家庭をとりまく地域資源の発掘から協働、子育て文化の醸成に至る包括的な実践モデル（地域を基盤とした子育て支援）の専門的機能について検討している。</p>	
橋本 祐子 教授	前期・後期課程
<p>専門は、発達心理学と幼児教育。主に、幼児期・児童期における公平観の発達、乳幼児期の遊びの発達を解明すると共に、ピアジェの構成論の立場から、知的および社会道徳的自律を目指す教育・保育実践の内容と方法について研究している。</p>	
原田 大介 准教授	前期課程
<p>専門は、国語科教育、授業研究、インクルーシブ教育です。通常の学級に在籍する児童・生徒の実態をふまえた、実践的・臨床的な研究をすすめています。文化や制度の問題から、学力問題や授業のつくり方まで、子どもたちの「ことばの学び」をめぐる社会的な事象について幅広く研究しています。</p>	
日浦 直美 教授	前期・後期課程
<p>幼児教育・保育学を人間科学と捉え、特に保育現場での人間関係に焦点を当てて、子どもの人権に関する保育内容や保育の質を保障する保育者の専門性について、地域・社会・世界との関係を視野に入れながら研究を行っている。</p>	

藤井 恭子 教授	前期・後期課程
ヤマアラシ・ジレンマ（他者との適度な心理的距離のとり方をめぐるジレンマ）について、思春期・青年期から成人期までの友人関係を中心にライフサイクルの視点でその発達的变化や意義についての心理学研究を行うほか、アイデンティティの生涯発達との関連についても検討している。また、教員養成課程における主体的・協働的な学びの構築と意義についても、調査研究ならびに実践活動を行っている。	
藤木 大三 教授	前期課程
幼児・初等体育における、ボールゲームに関する総括的研究を行っている。幼児体育では、主にボールを用いた簡単な運動遊びと健全な心身の発育について、基礎的な知見構築に努めている。また初等体育では、ミニバスケットボール、Tボール、サッカー、フラッグフットボール等、既存のボールゲームの技術戦術、技能の習得方法や指導者の関わり方を中心に、特にアメリカの初等体育の現状と比較しながら、多面的な研究を行っている。	
増山 初子 教授	前期課程
文学に描かれた子ども時代というテーマで、近・現代の日本の作家たちが自身の子ども時代を描いた作品世界を考察することによって、子ども時代を想起し、物語ることの意味を究明することを研究課題としている。児童文学や絵本の世界など広く児童文化も視野に入れ、改めて子ども時代の意義を明らかにすることを志している。	
湊 秋作 教授	前期・後期課程
環境教育を幼児から児童・企業・市民を対象として研究実践を行っている。五感を基盤とした理科・生活科の教育開発と生物多様性と五感教育を共にできる校庭・園庭の開発を行っている。ヤマネの総合的研究からその成果を環境保全・環境教育に活かす活動を国内外の研究者・行政と展開している。SDGs・生物多様性の研究と実践を展開している。	
峯岸 由治 教授	前期・後期課程
私は、小・中・高等学校における社会系教育の授業改善を図るため、以下のように研究を進めている。 1. 社会系教育（社会科・生活科・総合的学習等）実践の収集 2. 授業内容と授業展開を視点とした社会系教育実践の分析と体系化 3. 社会系教育における授業開発と評価	
宮本 健市郎 教授	前期・後期課程
19世紀末から20世紀前半にかけて、世界的に広がった新教育運動（子ども中心の教育思想と教育実践）の歴史的研究を進めている。アメリカにおける新教育運動のなかで開発されたドルトン・プラン、ウィネトカ・プランなどの教授理論史研究が中心である。同時に、教育実践を成り立たせている環境として空間と時間のもつ教育的意義、たとえば、授業時間割や学校建築の歴史についても研究している。	
山本 健治 教授	前期課程
専門は学校臨床心理学。主要研究テーマは『学校心理臨床における効果的な支援システムの構築』である。学校心理臨床の役割は、学校内で起こる児童生徒の様々な心理的な問題に対する心理的援助であり、そのための学校支援システムはいかにあるべきかについて、学校臨床心理学の視点から研究している。	
渡邊 伸樹 教授	前期・後期課程
専門は数学教育学。算数・数学教育に関するカリキュラム・教育内容・教材の開発、現場教員の算数・数学の指導力向上を目指す授業研究（RTMaC授業研究）、的確な算数・数学の指導のできる教員の養成などの研究を実践的に行っている。	

以上